

現代美術館特任館長に、
小林央子さんが就任

平成20年2月1日、十和田市現代美術館開館に向けて、十和田市出身のフリーキャスター・小林央子さんが特任館長に就任しました。これまで、野外芸術文化ゾーンの検討委員会や市民フォーラムなどのさまざまな活動に関わってきた小林さんですが、特任館長として、国内はもとより海外からも注目を集める現代美術館のPRや広報活動を中心に活動してゆきます。東京を拠点に活動している小林さんの力も加わって、4月26日の開館に向けてラストスパートです。



中野渡十和田市長より
辞令を受ける小林央子特任館長

十和田市現代美術館開館記念展
「オノ・ヨーコ 入口」展準備中

十和田市現代美術館では、開館記念特別展として「オノ・ヨーコ 入口」展を開催いたします。現代美術館のために常設展示作品を制作するアーティストのひとりであるオノ・ヨーコさんは、戦後日本のアート界においてもっとも重要な作家のひとりであり、国際的にも高い評価を受けています。その活動は従来の価値観にとらわれることなく、アート、音楽、パフォーマンス、映像と多岐にわたっています。オノさんは観客が能動的に参加することで成立する作品を多く制作していると同時に、展示される場所やその意味を考察した作品を発表し、人々に深い感銘を与え続けています。

会期：平成20年4月26日～7月6日（予定）
作品点数：9点（予定）

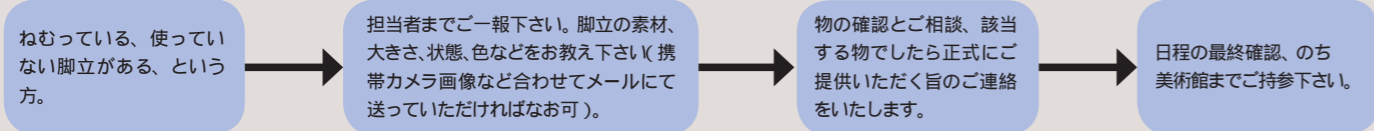


Yoko Ono installing "Wish Tree" EnTrance
June 23 July 25, 1997
Lonja del Pescado, Alicante, Spain
Photo Credit: Miguel Angel Valero
Courtesy of Lenono Photo Archive

脚立の募集 オノ・ヨーコ作品に使用する素材をご提供下さい

十和田市現代美術館では、開館記念展「オノ・ヨーコ 入口」展の展示作品「スカイウォッチ・ラダー（空をみるための梯子）」に使用する「脚立（きやたつ）」を探しています。観客参加型の作品を数多く手がけているオノさんですが、今回の十和田市での展覧会では作品制作に必要な素材を、市民のみなさんから募集します。オノさんの作品の一部を担う素材の提供に、ぜひご協力下さい。

募集の流れ



ご提供いただいた脚立は、展覧会終了後はオノさんの作品となりますので、返却はできません。あらかじめご了承下さい。各お宅まで取りにはうかがえませんので、美術館までお持ちいただける方のご応募をお待ちしています。

ご応募・ご質問は下記まで

十和田市役所・企画調整課 担当：山貝
電話：0176-23-5111（内線167）
ファクス：0176-24-9616
Eメール：masanori_yamagai@city.towada.lg.jp
募集受付期間：
平成20年3月1日（土）～3月21日（金）

脚立の一例：木製の自立する脚立9つ程度を募集しています。同じ大きさ・形状が複数個エントリーされた場合は、先着順とさせていただきますのでご了承下さい。



《Skywatch Ladder》、
"Yoko Ono: sognare,"
Museo Santa Caterina, Treviso,
September 29, 2007 to January 13, 2008,
curated by Jon Hendricks.

ボランティアガイド募集のお知らせ

十和田市現代美術館の作品解説をするボランティアガイド（通称：現美応援隊）を募集します。一緒に美術館を盛り上げてゆきましょう。
活動日 開館日～春祭り期間中（4/26～5/6）、土・日および祝日、平日のうち学校団体客来館時、など
説明会および研修について 申込者を対象に3月下旬に説明会を、4月上旬に研修を予定しています。
問い合わせ先 企画調整課 担当：中野渡（内線166） Eメール：kazuyasu_nakanowatari@city.towada.lg.jp



十和田市現代美術館 準備ニュース

VOL.2



平成20年4月26日、
十和田市現代美術館が
開館します。

開館まで残り2カ月を切り、市民のみなさまのご協力をいただきながら、準備も佳境を迎えています。4月下旬は例年ですと、ちょうど官庁街通りの桜が満開の時期となります。みなさまのご来館を心よりお待ちしております。

右写真 / 2月、まだ雪の残る、開館準備中の美術館の様子。
Photo by Mitsuhiko Wada

写真は常設展示作家の1人、高橋匡太さんの照明作品照射実験の様子です。これまでも京都・二条城や青山・国連大学のライトアップ作品など、さまざまな照明を使ったプロジェクトをおこなってきた高橋さんですが、十和田では、建築と一体になった照明空間そのものが恒久設置作品となります。日没時間になると自動点灯され、美術館は日中の白い箱から一転してカラフルな表情をみせます。



Photo by Kyota Takahashi

これは便利！美術館解剖図

十和田市現代美術館は、人々が気軽に集まり、交流し、くつろぐことができる場所です。アートと触れ合うことで、楽しく豊かな時間を共有できるような魅力ある美術館を目指しています。皆さん、気軽にご来館下さい！



ただいま作品制作中

開館に向け、アート制作作業もラストスパートです。特に、2月から3月にかけて、アーティストやそのアシスタントが続々十和田市を訪れ、作業は佳境に入っています。

エントランスホールの床は、イギリス出身のアーティスト、ジム・ランビーの「zobop」という作品が設置されます。カラフルで鮮やかなビニールテープが隙間なく覆いつくす作品です。テープを張るのはすべて手作業。この時点では、貼り作業はほぼ終了しており、仕上げ工程の準備中でした。ジム

は、床面などにテープを貼りめぐらせる独特の作品を「zobop」と名付け、様々な場所で発表してきましたが、展覧会などでは会期中限定設置が多く、美術館のような公共空間での恒久設置はこれが初めて。特殊な樹脂で表面をコーティングするために、表面に落ちた細かいダストを取り除くのはもちろん、指紋による曇りも綺麗に取り去ります。作品を傷めずに拭きあげるデリケートな作業が続きます。



ジム・ランビー《Zobop》制作風景
Courtesy of The Artist and The Modern Institute / Toby Webster Ltd, Glasgow

こぼれ話

シールなどを貼ったときに空気が入ってしまうことがありますね。これも今回の悩みの種。一見、滑らかなスケートリンクのように見える作品ですが、顔を近づけて探すと、ところどころに米粒ほどの気泡が。これらも、ひとつひとつ針を使って取り去っていきます。



来館者にくつろぎを提供する休憩スペースの床でも作業が進んでいます。どこか懐かしさを感じさせるような花柄をモチーフにしたこの作品は台湾出身のアーティスト、マイケル・リンによるものです。彼はアジアの布団などの日用品の装飾に用いられる「花」をモチーフにしたアート作品で知られる作家です。カフェに併設された休憩スペースの床面いっぱいを埋める作品のため、アシスタントと制作スタッフが計七名ほどで作業を続け、完成までは一か月近くかかります。これまでのマイケル・リン作品は、スペース全面に連続してモチーフを描き、それが一枚の布のよう

に見えるものが多いのですが、今回は数枚の布を縫ぎはいたようなイメージになっています。構想にあたりマイケル自身が独自に十和田市をリサーチし、地元工芸品、南部裂き織の「はぎれを組み合わせ一枚の布を作りあげる」という特徴に着想を得たものなどの事。休憩スペースは無料ゾーンになっています。気が向いた時、散歩の途中にでも、ふらっと立ち寄りみてください。アートの中でゆったりくつろぐ、そんな新しい空間が官庁街に生まれます。



マイケル・リン《無題》制作風景



画像提供：西沢立衛建築設計事務所